

〈詩性〉の研究方法に関する考察

環境の〈詩性〉に関する研究 その2

A CONSIDERATION ON STUDY METHOD OF POETIC-IMAGERY

Study on poetic-imagery of environment Part 2

高木清江*, 瀬尾文彰**, 松本直司***

Kiyoe TAKAGI, Fumiaki SEO and Naoji MATSUMOTO

Poetic-imagery means a special and environmental element which gives rise to a strong impression and activation of consciousness. We can't find any precedent of the study on poetic-imagery in the past papers. It is important that we search a study method of poetic-imagery by ourselves. In this paper we tried to look below the surface of the poetic-imagery and search the method from the view point of the image structure. As a result, we acquired the guide of the study method.

Keywords: Poetic-imagery, Mental scenery, Image structure, Study method

〈詩性〉, 心象風景, イメージ構造, 研究方法

1. はじめに

前稿¹⁾において、文化的に質の高い環境の要件を環境の文化特性と呼び、その中でも特に〈詩性〉(詩的イメージ)が重要であることを述べた。詩的イメージは一般的なイメージとは異なる。この分野の研究にはほとんど先達というものが存在せず、いかなる方法によって詩的イメージを適切に、あるいはまがりなりにでも取り扱うことが出来るか、このこと自体が重要な研究課題である。²⁾

前稿¹⁾では〈詩性〉を『刺激や思いがけなさを通じて、強い印象や感動をもたらす、意識に活性をもたらす環境のイメージ的な特性』と定義したが、本論では、〈詩性〉の概念をさらに掘りさげて理解し、〈詩性〉をイメージ構造という観点から探り、今後の研究の進め方に対する指針を得る。

2. 〈詩性〉の概念

2-1 環境のイメージにおける〈詩性〉の位置づけ

(1) リンチのイメージと心象風景

都市の魅力についての古典的な研究としてK. リンチの研究²⁾がある。しかし、そこで扱われた都市のイメージは限定的なものである。すなわち、リンチ自身、環境のイメージはアイデンティティ、ストラクチャー、ミーニングに関わるとしつつも、実際にリンチの

研究で取り上げられたのはアイデンティティとストラクチャーのみで、ミーニングははずされている。³⁾

都市のイメージに関するミーニングには、ある地域が持つ社会的な意味、その機能、その歴史、また時にはその名称等も加えられるが、さらに、主観的ときり言いようのない様々な印象や情緒がその大きな部分を占める。ミーニングには個人差が大きいという、主観的な要素は取り扱いに困難が伴う。そのため、リンチの研究ではこれを外し、アイデンティティとストラクチャーに集中することになったのである。それによって都市のわかり易さと図式的イメージに関しては画期的な成果をあげた。しかし、都市の魅力が問題であるときに、アイデンティティとストラクチャーだけで十分に核心に迫ることができるだろうか。主観的な印象や情緒をはじめとする様々なミーニングが関わるからこそ、都市の空間が心引かれるものになっていくのではあるまいか。

我々は日々の生活の中で膨大な風景を知覚する。これらのうち、大半の風景は忘れ去られていくが、我々の記憶の中に定着するものもある。こうして定着したものは、我々にとってなにか重要な意味を有する風景のはずであり、折に触れその風景の情緒が意識の中で反芻される。これを心象風景と呼ぶ。従来の心象風景研究において、心象風景は「様々なイメージの中でも、特に心の中で風景と

* 名古屋工業大学大学院社会開発工学専攻
大学院生・修士(工学)

** 大同工業大学工学部建設工学科 教授・工博

*** 名古屋工業大学工学部社会開発工学科 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Nagoya Institute of Technology, M. Eng.

Prof., Dept. of Construction, Faculty of Engineering, Daido Institute of Technology, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.

して思い浮かべる視覚的なイメージ」と定義されている³⁾。心象風景も都市のイメージを示す言葉だが、リンチの都市のイメージと違ってミーニングを含めたイメージである。

心象風景といえども、リンチ的な視点と無関係なわけではない。記憶にとどめ易い風景の条件というものを考えてみると、ミーニングのほかに、リンチの legibility に通じる構造的な明瞭さがそのベースにあるであろう。“都市のイメージ”²⁾の中でリンチはスターンの言葉として「形態の明瞭さと調和によって、あざやかに理解できる外観への要求を満たすようなイメージを創造すること」に言及している。そしてリンチは「これは彼にとって、内的意味を表現するために絶対必要な第一歩であった」と記している。心象風景は内的意味に関わっている。そして、リンチらによって内的意味に至るための前提として、アイデンティティとストラクチャーが位置づけられている。こうしたことから、心象風景の定義をリンチとの比較において次のように記述し直すことができる。

リンチの都市のイメージ
 = アイデンティティ+ストラクチャー → 〈図〉
 心象風景
 = アイデンティティ+ストラクチャー
 +ミーニング → 〈絵〉

ここで心象風景を〈絵〉として、リンチの都市のイメージを〈図〉として示した対比は、図1と図2の対比に対応している。図1は江戸期の名古屋及び熱田の〈絵〉であり、当時の人々の心象風景と解することができる。³⁾ 図2はこれを筆者らがリンチ風に〈図〉化したものである。



図1 名古屋の心象風景

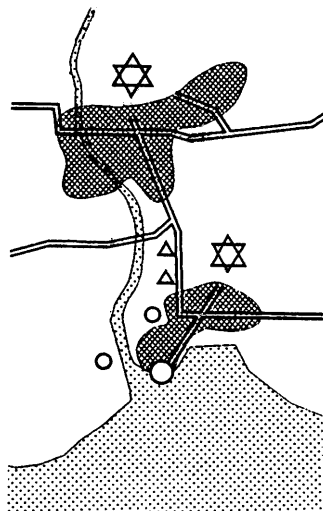


図2 リンチ風の図

〈図〉からは、ランドマークがどのような機能を持ちどのような印象をもたらすか、ディストリクトはどのような要素のあつまりでどのような印象であるかなどはまったく解らない。そのため、街の雰囲気は受け取れない。逆に〈絵〉はその都市の雰囲気を照らし出す。また、都市の歴史や文化などをかいま見せる場合もあり、そのようにして、都市のイメージの質的な深み、つまり内的意味にまで達することが可能となる。

魅力的な都市は分かり易いばかりでなく、人を引きつけ、心に残

る環境としての仕組みが隠されている都市でもあろう。このような都市の性格を捉えるには、〈図〉=イメージのレベルでは不可能であり、〈絵〉=イメージ、すなわち心象風景の操作によってはじめてこれを成し得ると考えられる。

(2) 心象風景と〈詩性〉

心象風景との関係でいうと、〈詩性〉は、心象風景におけるミーニングの1レベルである。それも、最も高い位置に位置づくミーニングのレベルであると考えられる。

しかし、ミーニングのレベル分けはそれほど明確なものではない。〈場所性〉〈歴史性〉〈風土性〉などに基づき「心地よさ」の気分などとして心に残る風景や、個人的な経験、例えば、忘れたい別離の場所であるために心に残る風景などがあり、それらのミーニングは同レベルにはない。そうした中で、一種芸術的な感動を備えるのが〈詩性〉であり、そのミーニングのレベルは一番上位に置くのが座りが良いであろうということである。

〈詩性〉は強い印象や感動という性格のものであるから、その意識への働きかけの強さは、心象風景形成のきっかけとなりやすく、そのとき〈詩性〉は心象風景の中心的なミーニングとなる。

こうして、心象風景と〈詩性〉とは、ミーニングの部分で密接に結びついているといえる。

図3は、リンチにおけるイメージと、心象風景の概念図である。

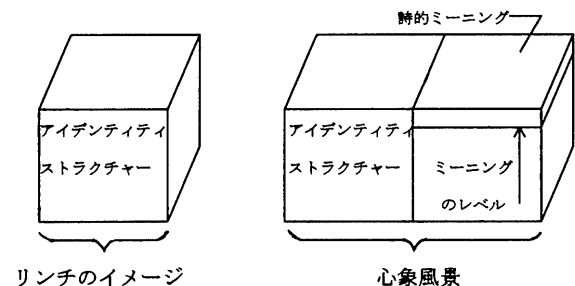


図3 リンチのイメージと心象風景

(3) 知覚心象/想像心象と〈詩性〉

通常、環境のイメージと言う場合のイメージには、知覚心象と想像心象の2種類の使い分けがあるように思われる。知覚心象とは、あるものを見ることを契機に想起されるイメージである。想像心象とは、これまでの経験において知覚したものが頭の中にあり、あらためて知覚刺激を要せず思い浮かべるイメージである。リンチのイメージと心象風景とは想像心象だと言える。

一匹の犬を見て生命力あふれる『猛々しさ』のイメージを感じる時、それは知覚心象である。目を閉じて、その犬を思い浮かべるときイメージは想像心象である。想像心象は印象に残った要素で構成されているといえる。したがって、くだんの犬は、多分、『猛々しい犬』として想像心象化されるであろう。

知覚心象について考えてみよう。上記の犬の例のように、ある対象を知覚するとは、犬なら犬としてのアイデンティティとストラクチャーと共になんらかのミーニング(『犬』という概念も、『猛々しい』という印象もミーニングである)を伴う単位を、背景の地の中に図として切り出す意識の作業だと言える。そして、その場合のミーニングの部分を知覚心象だと考えられる。³⁴⁾

アイデンティティとストラクチャーを認めるのみではイメージと
言うことはできない。¹⁵⁾ 知覚心象の場合は、対象に対応するミー
ニングの部分がイメージである。想像心象の場合に、ミーニングの
みではなく、アイデンティティとストラクチャーを含めてイメージ
である¹⁶⁾ のとは違っている。例えば、椅子に関して、腰掛けると
ころ、背もたれ、脚、等の集合を1つのまとまりとして認めること
は、アイデンティティとストラクチャーを認めることである。座る
ことができるので『椅子』であると認め、革張りの質感から『ゴ
ージャス』だと感じることは、そのもののミーニングを認めること
である。このミーニングの部分が知覚心象を形成する。

ミーニングのレベルには、概念的なミーニング（例えば『椅
子』）から詩的なミーニングまでの幅があり、その間に各種のイメ
ージのレベルが存在する。

〈詩性〉のイメージは、独特の意識の働きであり¹⁷⁾、経験や記憶
の蓄積からなるイメージのストックには含まれていない。そのため、
そのイメージをどう表現すれば良いか、私達は表現の言葉を知らな
い。知覚の現場において、知覚心象としてのそれを感動や強い印象
として受け止めるほかはないのである。その印象の深さによって、
それをもたらしたアイデンティティ、ストラクチャーと共に、あら
ためて想像心象のためのイメージのストックに組み込まれていく。

こうして、〈詩性〉は知覚心象を刺激的にし、想像心象のミー
ングとして心象風景にあずかり関与することになるのである。

2-2 詩的イメージの深層心理

イメージを、関わる意識の深さ¹⁸⁾の軸で分類してみると、経験
や記憶に基づき意図のないし習慣的に想い浮かべることのできるイ
メージと、意識の底の方から上昇してきて意図的には操作不可能な
深層心理的イメージが存在すると考えられる。¹⁹⁾

深層心理的イメージを考察するためには、無意識についての理論
を参照する必要がある。深層心理学では、精神を意識の層と無意識
の層からなるとしている。意識の層には『表層の意識』と『隠され
た意識』とがあるが、ここではこれを、丸山圭三郎⁴⁾にならって表
層意識・深層意識と表現することにする。^{10) 11)}

表層意識・深層意識と無意識との間には大きな断層があると考
えられている。無意識は、生命的・根源的エネルギーとしての〈欲動〉
の座である。〈欲動〉の理論は、フロイトに端を発し、その後いろ
いろに変容をたどるようだが、「心的なものとの身体的なものとの境界
概念」⁵⁾とするフロイトの基本的規定はいまだに重要だと思われる。
それは、肉体的底から溢れ出し、精神に活性と創造力をもたらす生
命的エネルギーであるとされる。これと詩的イメージは深く関わっ
ている。フロイトならびに丸山を参照しつつ、次にそのことを考
えてみる。

一般に本能と呼ばれるものは、動物に備わっている遺伝的な行動
様式であると共に生命のエネルギーのこともである。そのような本
能は、人間の中にそのままの形で温存されてはいない。人間は、想
像力を具え、言語を用い、文化を所有することによって、本能的行
動図式が壊れてしまった特異な動物である。文化的拘束によって破
棄され、変形されて、無意識の中に秘匿された生のエネルギーが前
述の〈欲動〉である。〈欲動〉は抑圧された欲望とは異なる。欲望は意
味あるものとして感じ取られる心的活動のプロセスを踏んでいる。
それに対して、フロイトも言うように、〈欲動〉は心的活動の中には

いかなる場も占めない。そのままのかたちでは、不可知物であり、
カオスである。しかしながら、この暗闇のエネルギーに、人は生き
ていく上で負うところが大きい。それは頻繁にという意味ではない。
無意識から意識への欲動エネルギーの飛躍は“昇華”と呼ばれるが、
“昇華”の体験は極めて非日常的な事態と言わねばならない。それ
は不可知なエネルギーを意味あるものとして受け止める体験だが、
多くの場合に言語化不可能な、ただ感動とか放心といった、生体
のおのきの瞬間として受け止められるだけである。¹²⁾

そして、この体験こそを、〈詩性〉の体験の心髄と考えるべきであ
らう。

それに対して、もろもろの欲望の文化的・社会的抑圧が深層意識
のうちに堆積物を形成しており、これがいわゆるストレスを引き起
こす原因となっている。通常、人は“浄化(カタルシス)”という
手段によってその解消を図る。“浄化”は芸術の機能を説明する重
要な概念ともなっている。すなわち、「演劇や音楽が激しい感情を
誘発する時、意識の下に鬱積していたバツスが放出されることにな
り、心をその重圧から解放して軽快にさせる作用」⁴⁾、それが“
浄化”である。“浄化”体験における心的内容がなかなか言語化し
にくいことは“昇華”の場合と共通している。しかし、以上にみて
きたように、精神作用としては両者は全く異質のものである。

“昇華”における感動や放心といった体験こそを、真の〈詩性〉の
体験と考えるべきであると筆者らは考える。しかし、“昇華”と“
浄化”の間に線を引くことは現象理解として難しいし、イメージ研
究の現状では“浄化”を問題にするだけでも十分に意味が深いと考
えられる。そのため本研究においては、〈詩性〉ないし詩的イメ
ージの概念を、深層心理的な位置づけとしては、“昇華”と“浄化”の
両者を含めたものと考えたい。したがって、注9)でふれたバシュ
ラールのイメージやユングの集合的無意識など、丸山によれば“浄
化”の範疇とされるイメージも詩的イメージに含めることになる。
いずれにせよ“昇華”と“浄化”の体験内容は日常言語で表現でき
るものではないという点で、表層意識レベルのイメージ体験と一線
を画する。図4参照。

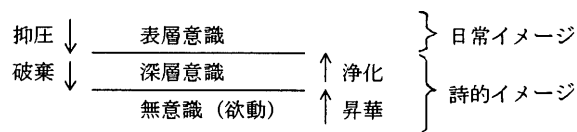


図4 意識・無意識構造における昇華・浄化と〈詩性〉の位置¹³⁾

2-3 詩的イメージの把握可能性

上に見てきたように、詩的イメージが意識の深層ないし無意識か
ら発するイメージであり、日常の言語によって簡潔に表現するのが
困難な性格のものであるとすると、研究上、その存在の事実をどの
ようにして知る可能性があるだろうか。

通り一遍のアンケートや質問によって触れることの出来るのは、
表層意識レベルの動きにとどまると心得るべきであろう。ここで、
臨床的な深層心理学が患者ないし被験者の深い意識に迫ろうとする
場合にとる方法がいかなるものかを参照する。¹⁴⁾ 河合隼雄は次の
ように記述している。

「人間を相手とする場合、それを『客観的対象』とするのではな

く、むしろ感情を共有するような態度をとってこそ、事態が詳しくわかってくるのである。」⁶¹⁾

「深層心理学の場合はまず、クライアントと治療者の間で極めて主観的な経験の共有があり、その後その現象を出来る限り客観的に記述しようとする態度がでてくる。」⁶²⁾

分析の対象者に対する深層心理学者の態度は、「『解釈を与えるもの』として存在するのではなく、『両者ともに同じ方向に向いて進む』ことをしなくてはならない。」⁶³⁾

ここで述べられているのは、医者が患者の気持ちを解きほぐすようなやり方で、互いに素直な雰囲気を作り、被験者と同じ気持ちになることによって同化し、被験者の心の中を、自分のこととして見つめることの出来るようなインタビュー方式ということになる。自分のこととするのだから、言葉になりにくい体験をも理解できる。しかし、この方法のもついかにも主観的な性格についてはどう考えたらよいのだろうか。この点について河合は次のように述べている。

「イメージこそは『私』自身にとっての経験であり、他の誰のものでもない。」⁶⁴⁾

自然科学は「『私』を出来る限り排除することにより、その普遍性を獲得してきたのである。自然科学の根本には、自と他の区別を明らかにすること、が存在する。そのように峻別された『自』が『他』を客観的に観察することによって得た知見は、『自』と関係がないために、観察者の存在をこえた普遍性をもつ。」⁶⁵⁾

それに対して深層心理学では、「個々の人が個々に自分に対して探索を行うことになるが、そこには自然科学とは異なる次元での普遍性が生じてくる。それは個を消して普遍を研究することによる普遍ではなく、個より普遍に至る道である。」⁶⁶⁾

したがって、「深層心理学は、いわゆる自然科学ではない、と思っている。ただ、わざわざ『いわゆる』とつけたのは、深層心理学を新しい科学のひとつとして考えることも可能と思うからである。」⁶⁷⁾

ここに、主観的なイメージを主観的に把握することの学問としての可能性が示されている。すなわち、人間の心の深みに関わる問題を研究するには、それに適わしい方法があり、それはいわゆる自然科学とは違うにしても、対象を適切に理解する方法が科学である限り、それもまた科学なのだということである。

3. <詩性>のイメージ構造

3-1 イメージ構造

(1) イメージ構造の概念

通常、イメージと呼ばれる意識の動きには、思い浮かべるという現象と、その思い浮かべたイメージを連想的に発展させていく現象とが含まれている。前者を“想起”、後者を“展開”と呼ぶことにする。⁶⁸⁾

私達が何かをイメージする場合、まずはあるイメージの想起があり、そこから展開、さらにまたその先の展開へと進んでゆくと考えられる。心象風景のような環境的なイメージの場合、イメージ関連の要因は一つではないのが普通だから、想起・展開の流れは1つではなく、複数の流れが存在するし、また、1つのイメージの想起から複数の展開が生じたり、複数のイメージの流れが相互に関連をもったり、複雑に絡み合っただけで展開がなされる場合もあると考えられる。

したがって、環境のイメージは1対1の記号関係として考えるよりは、テキスト⁶⁹⁾的な網目状の構造をなすと考えるのが適当である。この構造をイメージ構造と呼ぶことにする。

(2) 日常的なイメージ構造

私たちが普段の生活で思い浮かべるような日常的なイメージの流れ、すなわち表層意識におけるイメージの流れに基づく想起・展開の構造を考えてみると、例えば「街灯+樹木+ベンチ+歩道」の風景から『公園』を想起し、そこから『ゆとり』や『くつろぎ』に展開する場合。あるいは『最寄りの商店』の想起から『親しみがある』に展開する1つの流れに、『住宅群』の想起から『生活感がある』に展開するもう1つの流れが次の展開で合流し『親しみのある』にイメージが収束する場合等を、例として挙げる事が出来る。

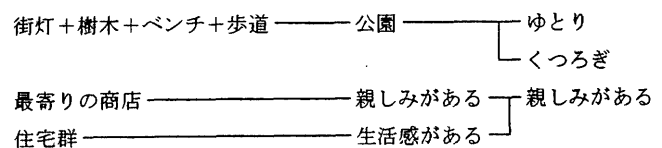


図5 日常的なイメージ構造

きまりきった連想の原則に従ってイメージ展開の流れが形成されるのが、表層意識レベルでのイメージ構造の通常の状態であると考えられる。それに対して、詩的なイメージ構造にはそれとは違った個々の型が考えられる。

(3) 詩的なイメージ構造

詩的なイメージ構造は、日常的なイメージ構造を逸脱した矛盾や意外性を含んだ構造をなすと考えられる。その根拠は、<詩性>がもたらされる仕組みについての考え方に由来するものであり、筆者らはその考え方をロシアフォルマリズムに見られる『非日常化』あるいは『異化』の概念から延用している。

シクロフスキーによれば、芸術とはイメージによる思考であるとか、音楽も、建築も、叙情詩も、イメージによる思考として理解されねばならぬと言われ続けてきたのだが、実は、イメージそのものにはそれほど重要性はなく、

芸術家達は、「イメージの創造以上に、イメージの配置の仕方に莫大なエネルギーを注いできている」⁷¹⁾のである。

「ランプの丸い笠のかわりに西瓜と言ったり、あるいは頭のかわりに西瓜と言ったりすることは、ランプの笠や頭の性質の1つの対象を抽象化するだけのことで、・・・(イメージによる)思考であるとしても、詩とは全く無関係なのである。」⁷²⁾

また、ムカジョフスキーによれば、

「比喩性への傾向が最高度に実現されるのは、他ならぬ伝達の言葉においてであって、ポエジーにおいてではない。」⁷³⁾

以上は、表層意識のイメージが詩とは無関係であることを述べている。それでは詩とは何だろう。それは、日常性との対比において成立する概念であるという。日常生活は、表層意識にのっとってほとんど自動的に流れていく。しかし、とシクロフスキーは言う。

「『もし、多くの人々の複雑な全生活が無意識のうちに過ぎたこととするなら、その生活は存在しなかったのと同じことであろう。』それだからこそ、生の感覚を回復し、事物を意識せんがために、石を石らしくするために、芸術と名づけられるものが存在

するのだ。」⁷⁾

「事物に感覚を与えることが芸術の目的であり、日常的に見慣れた事物を奇異なものとして表現する〈非日常化〉の方法が芸術の方法であり、・・・」⁷⁾「芸術的な言葉・・・」は「知覚の自己運動のなかから脱出するために意識的につくりだされた言葉」である。したがって、「詩的言語とは、難解で、了解を拒絶し、理解するに時間のかかる言葉であるということになる。」⁷⁾

そのような詩的言語の例として、例えば、マヤコフスキーの次の言葉を示している。

「もしもぼくが億万長者のように赤貧であったら
もしもぼくが太平洋のように小さな男だったら」⁷⁾

これは例としては小さな例と言わざるを得まいが、矛盾形容法にのっとるこのような小さな言葉によってさえ、表層意識に切れ目が走るのをわれわれは覚えるであろう。

小説家の大江健三郎は『小説の方法』の中で、ロシアフォルマリズムを深く意識しつつ次のように書いている。

「芸術の手法は、ものを自動化の状態から引き出す『異化』の手法であり、知覚をむづかしく、長びかせる難渋な形式の手法である。」⁹⁾

「小説は人間をその全体にわたって活性化させるための、言葉による仕掛けである。」⁹⁾

以上から、詩的な効果というものは、通常とは異なる関係に由来する一種の異様さから生じるものであることが理解される。そしてその目的は、人の生を日常性への埋没から救い、生き生きとさせることにある。

大江風に言うならば、詩的な環境とは、人間をその全体にわたって活性化させるための、空間や事物による『異化』の仕掛けであるということになる。

このように考えると、本論においてこれまで詩的イメージと呼んできたものは、実は、そのような特殊なイメージが存在するのではなくて、イメージ間の特異な関係に由来する心の現象をいうのだと理解される。したがって、本節冒頭に述べたように、詩的なイメージ構造は、日常的なイメージ構造を逸脱した矛盾や意外性を含んだ構造をなすと考えられる訳である。そのため、詩的イメージは「・・・みたい」「・・・の感じ」のような言葉で表現できるものではなく、一般的に言葉になりにくいのが、あえて言えば、「はっとした」「不思議な感じ」「おもしろい」などの表現をとるものと思われる。

3-2 ケーススタディ=〈詩性〉のイメージ構造の把握の試み

上に述べた〈詩性〉のイメージ構造に関する考え方の妥当性を検討するために、ケーススタディを行った。被験者は建築系の学生1人。海外旅行中に印象に残った心象風景のうち1つを選び、それについてどのように感じているかを、深層心理学の臨床インタビューに習って、「親身に」「同調的」にききとりをした。¹¹⁾

心象風景場所はシュタデルホーヘン駅（チューリッヒ）である。サンチャゴ・カラトラバの設計になる話題の建築であるが、被験者は当初そのことを知らず、歩いているうちにたまたま行き当たったものである。図6に見るように『歩道』『駅』『地下道』が上下3段に分かれており、平面的には曲線を描いて配置され、それが『街』と『街』の間に埋め込まれている。ホームと線路をまたいで、

『街』から『歩道』へと『橋』がかかっている。

インタビューのほぼ全文を《付録》に掲げた。整理はしてあるが話の順序などはそのままである。したがって繰り返しも多いし、話があちこちとんで前後しており、心象風景の中を彷徨いながら、ミーニングを手探りする様子がかがえると思う。ここから、被験者の心の動きを様々な形で読み解くこと（＝分析）ができる。例えば、

「外を歩いているけど駅を歩いている感じ。フレームは骨のイメージ。葉っぱがホームに落ちてくる。人工と自然がとけ込んでいる感じ。住んでみたい。毎日散歩したい。」

という段落では、『歩道』を歩いていると骨状（異様なイメージ）の『フレーム』という人工物が駅と一体性を感じさせ、と同時に、『歩道』に舞う落葉はホームにも落ち、と考えると身は既にホームにあり、ホームの人工が自然にとけ込んでいるという感興にとらえられ、その感興は毎日散歩するために住んでみたいという形でイメージを『街』へと引き寄せている、といった具合である。

全体を通して、『歩道』『駅（ホーム+線路・・・）』『地下道』『橋』『街』が主要なイメージ要素になっていることが分かる。それらのぶつかり合いが、普通でないイメージの関係として感じとられていると推察される記述が多い。

「橋から駅に入れる。」（意外さの想いが込められている）

「駅に歩道から入れる。降りていくと中に入れる。そうするとイメージが変わってくる。」

「郵便局の建物（『街』を代表している）からも降りられる」

「地下は駅とつながっている。外ともつながっている。」（その



写真1 シュタデルホーヘン駅

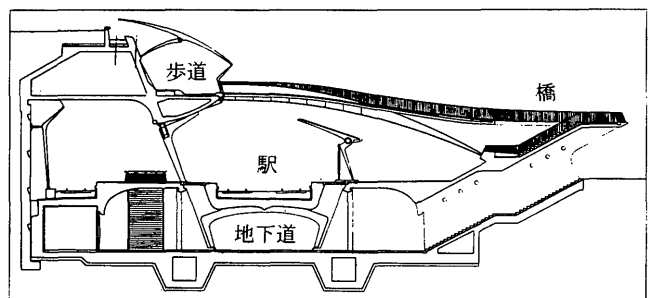


図6 シュタデルホーヘン駅断面図

つながりが意外さを感じさせることがほのめかされている)
 「電車に乗ってくと普通の駅。道から来ると全く違う駅。」
 「最初は駅だと知らなかった。知らない間に駅に出ちゃった。」
 「ホームの屋根を歩いているのはすごい。・・・いつのまにか屋根を歩いているのは冒険である。」
 等。

さらに、それぞれの部分でわき上がる様々な意外さの想いがあり、それらが相乗的な効果となって、感興のクライマックスを作り上げていく。例えば次のような言葉にその表現を見て取れる。

「見たことないところ。体験したことのない感じ。冒険しに入ったという感じ。わくわく感がある。」

「この駅は『おー』という感じ。」

以上のようにして全面的に展開した分析の結果を整理し、イメージ構造として表現した。図7にその一部を示す。ただし、表の右側2行の言葉はイメージを表す言葉ではなく、イメージとイメージの日常的理解を超えた関係の中に或リアリティを感じ取った時に発せられる“感嘆詞”のようなものであり、これによって、詩的イメージの体験がここに存在することを示している。

以上から、詩的なイメージ構造は日常的なイメージの想起・展開のみではなく、歪曲、対比、対立、矛盾、複合などというイメージ間の特異な『関係』を伴う構造として示されることを把握することができた。^(注1)

4. むすび

本論では、〈詩性〉の概念を前稿におけるよりもさらに掘り下げて理解し、イメージ構造という観点から〈詩性〉のイメージを探った。詩的イメージは、通常は心の奥に潜んでいる無意識ないし深層意識

の作動する状態であることを示した。次いで、イメージの流れをダイアグラムのに表示したものをイメージ構造と呼ぶこととし、詩的イメージのイメージ構造を検討した。結果として、〈詩性〉のイメージは、イメージ間の特異な関係に由来していることを示した。結論として、①〈詩性〉研究の対象として心象風景をとり上げることの妥当性を示し、②心象風景を深層心理学的インタビューを通じて分析し、その詩的イメージ構造を把握する可能性を明らかにし得た。今後の課題としては、この方法によって詩的イメージの構造を様々な事例について検討し、〈詩性〉のメカニズムの解明を進め、同時に研究方法の改善をも合わせて進めていく必要がある。これを積み重ねて将来には、詩的な環境の設計指針へとつなげてゆく予定である。

注)

- 1) これまでに多くのイメージ研究が行われている。これらの研究は、場所や環境の評価研究であったり、物的な条件とイメージとの関係性の研究であったりする。また、扱う対象は、屋外では街路や参道、駅前広場や空地など、屋内ではオフィス、住宅の室内、教室、病院などと様々である。しかし、これらの研究がとっているイメージ評価の方法は似かよっており、大別すると2種類であると言える。1つはSD法を用いて場所や景観、快適性などの評価を行う方法である。もう1つは、イメージマップを描かせる方法である。環境工学の論文に、汗などの生理量や脳波をもちいて実験を行っているものがある。快、不快が生理量にどのように影響を及ぼしているか、脳波の反応はどうかといった問題は確かに興味深い。しかし、このような研究においては、生理的反応の根拠が捉えにくい。そこで、ここでもSD法による意味分析がなされているのが現状である。知覚心象、想像心象という考え方(後述)で見た場合、SD法は知覚心象と想像心象のどちらも対象としており、意識の深さのレベルについていうと、これら2つの方法とも表層意識(後述)において生起するイメージを扱っているにすぎない。勿論、それはそれで、各々の研究の主旨に沿い、重要な成果につながる場合もあろう。しかし、本研究の狙いとする〈詩性〉を扱うには、いずれの方法も適当とは言えない。

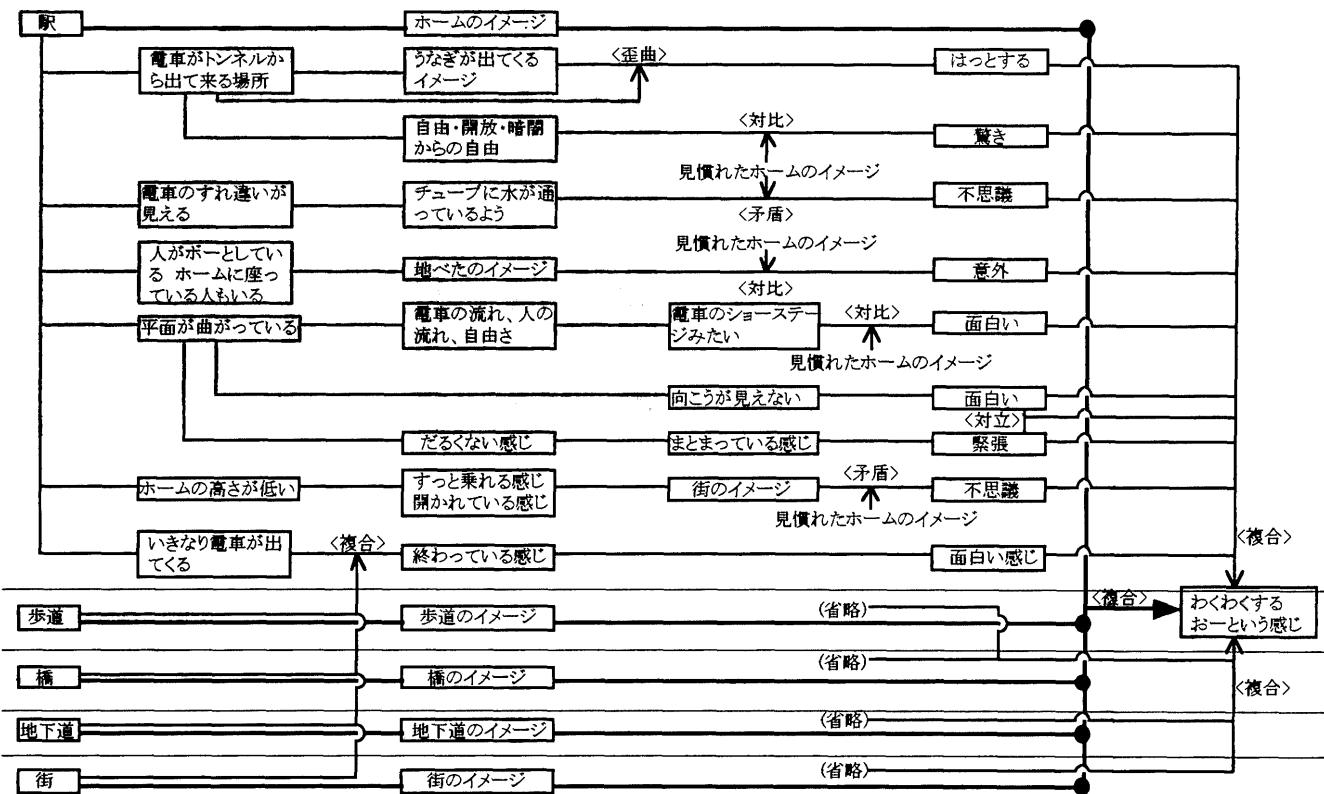


図7 詩的イメージ構造図の一部 (ケーススタディより)

2) 「環境のイメージは3つの成分に分析される。それは、アイデンティティ identity (そのものであること), ストラクチャー structure (構造), ミーニング meaning (意味) である。」²⁾ 「意味のグループ・イメージは、実体と関係の知覚ほどには一貫していない。意味はさらにこれらの2つの成分 (アイデンティティ, ストラクチャー) ほど容易には、物理的操作に影響されることはない。もしわれわれの目的が、さまざまな背景をもつ無数の人々の喜びのための都市、そして将来の目的にもかなう都市をつくることにあるのなら、イメージの物理的な明瞭さに集中して、意味の方はわれわれの直接の指導なしに展開させる方が賢明であるとさえ言える。」²⁾ 「都市についての個人的な意味は、その形態がわかりやすい場合でさえ非常にばらばらなので、少なくとも分析の初期の段階では、意味を形態から切り離してもよいだろうと思われる。したがって、この研究は都市のイメージのアイデンティティとストラクチャーに集中して進められることになる。」²⁾

こうした観点に立つて、リンチは都市のわかりやすさ legibility に重点を置きつつ、都市のイメージ分析を行っている。そして、アメリカの3つの都市、ボストン、ジャージ・シティ、ロサンゼルスにおける調査を踏まえて、5つの普遍的要素からなる都市のイメージの構造化を提案している。5つの要素とは、パス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークである。

3) 名古屋城と熱田神宮が印象深く描かれ、それを囲む城下町や門前町の様子に往時の賑わいを感じられる。城から熱田に通じる道は宮の渡り伊勢湾にひらかれている。

図2は図1を筆者らがリンチ風に<図>化したものだが、そこには明確なストラクチャーが示されている。2つの巨大なランドマークとそれに付随するディストリクト、それらを結びつけるパス、さらに、川と海によるエッジがある。上部のランドマークから下部のランドマークにつながるエッジとパスはほぼ平行に縦に走り、幾つかのパスと直行している。それらの直行しているパスもランドマークめがけて2本が平行に走る。2つのディストリクト内の小さなパスは、大きなパスに交差してわかり易い。これらのことから、わかりやすい構造を有した都市の<図>であることが読み取れる。

4) 記号論の言葉に言い換えるなら、あるものを知覚することは1つの記号を認めることであり、アイデンティティとストラクチャーは記号作用部、ミーニングは記号意味部ということになる。知覚心象は記号意味部に当たる。

5) 離人症のような症状を持つ人は感覚は正常でもその意味を感じることが出来ないという。例えば、音楽が流れている状況の中、音は聞こえるが、メロディーとして受け取れない等。しかし、一般には知覚はミーニングを含んでいる。知覚のうちのミーニングの部分が知覚心象である。

6) 既述の如く、リンチのイメージでは[アイデンティティ+ストラクチャー]、心象風景では[アイデンティティ+ストラクチャー+ミーニング]がイメージである。

7) 「2-2 詩的イメージの深層心理」参照。

8) 「意識の深さ」という言い方にどれだけ学問的な確証があるのか (例えば神経生理学的な根拠づけ等が可能なのか) 明らかではない。「深さ」という言い方は一種の比喩として理解されたい。「無意識は心の深層の間である」といった言い方に近い言葉の用い方にすぎない。

9) 想像力あるいはイメージに関する考察のためには、二つのレベルの存在を明確にする必要があるとバシュアールは言っている。ひとつは『再現の想像力』とバシュアールが呼ぶものであり、これは経験や過去とかかわり、追憶を掘りおこす。しばしば単純な暗喩 (・・・みたい、の感じ) として提示される。しかし、「活発にはたらく想像力はわれわれを過去からも現実からもひきはなす。想像力は未来にむかってひらいている」¹⁰⁾、とバシュアールが言うときの想像力は、記憶の層を突き抜けて、われわれの心のもっとも深部に潜む暗黒のエネルギーに触れている。深層心理学が『純粹昇華』と呼ぶこのような心の事態へと、想像力はポエジー (詩) とともにおもむくのである。そして、このような詩的イメージの生成を通じて人が自らそれと知らない自らの深い現実につつまれるときに、ひとは真の意味でやすらうのであるとバシュアールは言う。しかし、本論における概念区分 (後述) に従えば、バシュアールが『再現の想像力』とは異なるもっと深いイメージと呼ぶもののすべてが深層心理学の昇華にかかわるとは限らず、浄化に関わるものも含まれている。

10) 通常は意識から隔絶されているのが無意識だが、フロイトが言うように睡眠時に夢のイメージとして、その変容した姿を意識の世界に現わすことがある。さらに広い視点に立てば、一般大衆の集団表象、例えば民間

伝承、神話、伝説、格言、諺、あるいは詩に代表される様々な芸術作品にも見出されるとされる。

「夢は睡眠者の私的な神話であり、神話は諸民族の覚醒夢であって、ソフォクレスの『エディプス王』やシェイクスピアの『ハムレット』は、夢と同じように解釈されねばならない」⁴⁾

しかし、丸山はこのように理解される無意識を、実は深層意識のことであると述べている。さらに言うと、ユングの言う集合的無意識さえも深層意識の一部であると丸山はしている。

「これは系統発生のプロセスから生じた原体験の継承であり、個体が属している大なり小なりの集団 (家族・社会・民族) の記憶の堆積物である。」⁴⁾

深層意識は表層意識と同様にはいかにいまでも少なくとも意味をもつ。したがって構造をもつ。それに対し、〈欲動〉(後述) は一種のカオスであり、丸山は〈欲動〉に対してのみ無意識の名を与えている。ここでは、このような丸山の用語法になっている。

11) 本論でいう深層心理とは、深層意識と無意識とに対応している。

12) 巨大な樹木の前で超自然的なものに触れたように感じてただ瑞気の気持ちに圧倒される場合や、ある種の芸術作品の前で放心状態となり身内に熱いものが逆流するように感じる場合など。このような経験は精神の活性化のために重要である。天才と呼ばれる芸術家や思想家や宗教家だけが、この世と無意識の2つの世界を行き来し、無構造のエネルギーに構造を与えて意識の世界にもたらすべく心得た人なのであろう。こうしてもたらされた成果を通じて、一般人は初めてこれを日常化し、そのようにして人間の精神の歴史は流動していく。

13) 丸山による図を参照し本論の主旨に合わせて簡略化して示した。

14) 心理学の分野においても、深層心理学のように意識の深層の状態を探ろうとするものと、実験心理学のように行動や行為に関して追求するものがある。実験心理学は目に見えるもののみを追求している。深層心理学は目に見えないイメージをおっている。

15) 例えば「さくら」を思い浮かべる場合、一義的には「さくら」は「桜の花 (木)」という対象の概念を示すにすぎないが、「さくら」というものは様々なニュアンス (日本人においては「はかなさ」など) を含んでいる。記号学では前者をデノテーション、後者をコノテーションという。『想起』と『展開』はデノテーション、コノテーションに対応する。

16) 書かれた「作品」について何かを述べようとするならば、いきおい、その意味の確定に向かいがらである。しかし、意味は読みの成果であり、どのような意味を確定しようとも、しよせんは無数にある一例にすぎないという矛盾からは逃れられない。記号学者は、意味を放棄し、いろいろの意味を生み出しうる仕掛としてのみ、『書かれたもの』を観察の対象とすることに定め、そのようにとらえられた『書かれたもの』を、テキストと呼んでいる。テキストは意味の網目としてイメージされる。バルトは次のように記している。「1つのテキストを解釈することとは、それに1つの意味 (多かれ少なかれ根拠のある、多かれ少なかれ大胆な) を与えることではなく、反対に、それがいかなる複数から成り立っているかを評価することである。・・・理想的なテキストにおいては、網目が多様で、いかなる網も他の網の上に立つことがなく、互いの間でたわむれる。」¹¹⁾

17) このケーススタディは、〈詩性〉のイメージ構造把握の試みということで行った予備調査である。そのため、被験者1名について詳しく〈詩性〉のイメージ構造を見た。聞き取りを行う際に被験者のイメージにあいづちを打ったり、理解や賛同を示すことで、被験者が自分の想いに集中しやすく、また言葉を見つけやすいような状況を作るよう配慮した。最初は心象場所の状況があやふやであった被験者も、話を進めるに従って、イメージがしっかりと思い出されてき、話にくそうな状態から、話しやすい状態へと変化が見えた。被験者がこの段階に達し、インタビュアーが概要を把握したら、インタビュアーは「・・・ですか？」という質問式の問いかけを一切やめ、「そうよね」「そういうことってあるよね」「分かるわ」というように同調的な対応を通して、被験者の気持ちになることに務め、その結果、インタビュアーにとって訪れたことのない被験者の心象場所に自分がある気持ちになり、自分自身がその場所に行き歩き回りながら、驚いたり、楽しんだり、わくわくしたりしている様をまざまざと感じ取れるまでになった。

18) <歪曲>は作用部の変形イメージ、メタファ。<対比>は意味部のズレ。<対立>はイメージ相互の背反関係。<矛盾>はありえない関係。<複合>は複数のイメージの融合合体。上記のように、今回のケーススタディでは『関係』の整理を行ったが、今後、多数の事例分析を通じてさらに

明確化を期する必要がある。

<参考文献>

- 1) 高木清江, 瀬尾文彰, 松本直司: 環境の文化特性に関する考察 環境の<特性>に関する研究 その1, 日本建築学会計画系論文報告集 第502号 pp117-123 1997. 12
- 2) ケヴィン・リンチ著 丹下健三, 富田玲子共訳: 都市のイメージ, 岩波書店 1968
- 3) 渡辺成博, 松本直司, 高木清江: 心象風景の形成過程と実現の空間形態, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 31, pp175-180, 1996
- 4) 丸山圭三郎: 欲動, 弘文堂 1989
- 5) J.ラブランシュ, J.-B. ポンタリス 村上仁監訳: 精神分析用語辞典, みすず書房 1988
- 6) 河合隼雄: イメージの心理学, 青土社 1991
- 7) V. シクロフスキー著 水野忠夫訳: 散文の理論, せりか書房 1983
- 8) ヤン・ムカジヨフスキー著 平井正, 千野栄一訳: チェコ構造美学論集, せりか書房 1975
- 9) 大江健三郎: 小説の方法, 岩波書店 1978
- 10) ガストン・バジュラル著 岩村行雄訳: 空間の詩学, 思潮社 1969
- 11) ロラン・バルト著 沢崎浩平訳: S/Z, みすず書房 1973

<図版出展>

図1: 大日本五道中図屏風の一部 (財団法人三井文庫所蔵)
写真1, 図6: LOTUS 69, Rizzoli International Publication Inc

《付録》ケーススタディにおける聞き取り結果

橋から駅に入る。
橋のカーブしているところからフレームが見えている。
駅に歩道から入れる。降りていくと中に入れる。そうするとイメージが変わってくる。
郵便局の建物からも降りられる。
地下は駅とつながっている。外ともつながっている。一番いい景色はカーブした景色。
歩道は人が歩いている。駅に行かない人も歩いている。壁に落書きが書いてある。書いてはだめなのに。壁はコンクリート打ちっばなし。フレームの骨が黒いから強調される。
橋の上から緑が見える。緑が見えるのと見えないのはイメージが違う。浮いた感じがしなく、おちつく。緑があることによって、駅は余計際立っている、ういていない、周りと溶け込んでいる。
電車に乗ってくと普通の駅。道から来ると全く違う駅。
駅には人は居るが忙しそうではない。立地は都会という感じ。ポーとしている人が居る。電車を見ている。駅に座るところがあるし、地べたに座っている人も居る。
街の建物が見える。その間を車が通るの見える。
地下は自然の光が入ってこない。外とは雰囲気が違う。
歩道のフレームがないとこの魅力が半減する。フレームがないといけな。構造的にはなくてもいい。透明なトンネルのイメージ。普通のところを通っているのと違う感じ。隔てはないが、違うところを通っている感じ。普通のところよりわくわくする。青空の下を歩いているより構える気持ち。興味をそそる。神社の鳥居をくぐっている感じに似ている。入るぞという感じ。わくわくする気持ち。行ってみたい。
カーブしているところの方がいい。向こうが見えないと何が来るか解らない。期待感が増す。期待感の方が強い。
始めは橋は見えない。近づくと見える。なんだか終わりが見えない。予測できない面白さがあるし、階段になっているのかな等という予測する面白さがある。
フレームは冷たい感じはしない。ガラスは透明だが、ガラスが入ると透明なトンネルだがただのトンネルという感じ。ガラスがない方が軽い。ガラスがないぶん自然ぼく見える。自由な感じ。風が吹けば風があたるし、ガラスがあるとそれが違う。外を歩いているけど駅を歩いている感じ。フレームは骨のイメージ。
葉っぱがホームに落ちてくる。人工と自然が解け込んでいる感じ。住んでみたい。毎日散歩したい。
地下は教会みたい。
見たことのないとこ。体験したことのない感じ。道を冒険している。冒険しに入ったという感じ。わくわく感がある。毎日行くとわくわく感がなくなる

かもしれないがどっかにあるかもしれない。毎日いくと面白さが変わってくるだろう。冒険から愛着へと。
この空間が好き。次に自然が出てきて、次は人工かもしれない。それが冒険。フレームは木に見える。木のような。フレームの下を通ると交互に光りと影がおちる。
山の中を歩いている感じ。歩道を歩いているが、しかし、歩道ではない感じ。しかし、車が通らない。面白い空間。外国でもみたことがないし、日本でも見たことがない場所。森の道、山の道という感じ。平坦な山道。動いているときの方がわくわく感が強い。
駅から見たシーンが好き。
橋の下の曲線がいい。鋭い曲線。だるい曲線ではない。ぼやけた曲線じゃない。すっとスピード感がある曲線。
フレームは添えて出している感じ。あるものを支えている感じ。勢いを支えている。フレームは1つではない。だんだん出てくることによってよくなる。いっぱいあることによってせつぱ詰まる感じがする。
地下は両方がカーブしている。重い感じ。
ホームはうなぎの寝床みたい。トンネルがある。うなぎが出てくる。おっとおどろく。はっとする。電車だ。うなぎが顔を出しているように見える。トンネルから顔を出してくるのの一部始終が見える。
上から電車の行き違いが見える。電車のすれ違いがこの駅の部分だけ見える。チューブに水が通っている感じ。ここだけ透明になって中身が見える感じ。最初は駅だと知らなかった。知らない間に駅に出ちゃった。
この駅にあえたのはよかった。
晴れた日ばやりしている人がいる。なんで、歩道のところがガラス張りじゃないのかという人も居るだろう。でも、風が入ってくるのとっしょで雨が入ってくるのも自然。ガラス張りにすると閉じていて外が入ってこない。外と内が完全に仕切られている感じ。雨のときは傘をささなければいけないが、ガラスのない方がいい。雨が降ったら濡れてあきらめまじよ。雨にぬれるのもまた一興。
夜行ってみたい。いろんな角度から写真を撮りたい。写真を撮るのが冒険だったかもしれない。夜は影が落ちない。外が真っ暗だとフレームの良さがなくなってしまうかも。月明かりで影がおちて影があるかも。
山の中みたいのところを夜歩く。月とフレームの影、少し恐いかも。電車が止まる場所は明かりが点いているだろう。歩道の下がホーム。この下から明かりが光っている。どんな感じがするの。
曲がっているほうが動きを表している。
今の駅が建つ前と建つ後の周りの建築の様子を見てみたい。店ができたりしたのではない。昔は小さなところだけが駅だったと思う。
心に残る駅。京都や東京の駅は心に残っている。普通の駅は心に残らないがこの駅は心に残っている。ミラノやローマの駅は大きいのが、でも立派に作っているだけで「ふーん」という感じだった。この駅は「おー」という感じ。平面がまっすぐだったら面白さ半減。曲がっていると全然ちがう。曲がらせなくてはならないという感じ。曲線の流れもだるくない感じ。全体が曲がっていることによって全体がまとまっている、流れている感じ。曲がっている方が統一感がある。向こうの見えない面白さがある。駅にとって曲がっていることが大切。電車は長い。
線路とホームの高さが余りない。電車の通っているところが深くないから同じグラウンドのレベルでできているので外の道路から歩いてきてすっと乗れる感じ。外に開かれている。駅として閉じていない感じ。すっとはいれてきてしまう。
ホームの屋根の部分の歩いているのはすごい。レベルの違うところからホームにはいれる。いつのまにか屋根を歩いているというのは冒険である。いつのまにか駅に入ってきている。階段を降りたら駅に入っている。気がつかないで駅の一部に入っている。いきなり電車が出てきたらおわっている。おもしろい感じ。自由な出入り。
トンネルは、トンネルからの自由、開放的、暗闇からの自由。トンネルから電車が出てくると驚きがある。ホームの乗客ははっと光をあびる。
曲線は電車のスピード、人の流れ、自由さを現し、アピールしている。電車のショーステージのよう。ホームは、電車がトンネルから出てきて姿を見せる場所。電車に乗っている人は気づかない。
街の中は古い建物もある。煉瓦もある。近代的なものもある、がマッチしている。
これからこんな駅が増えるかも。すっとはいれる感じの駅。そうするとこの駅は普通になるかもしれない。

(1998年6月10日原稿受理, 1998年10月22日採用決定)